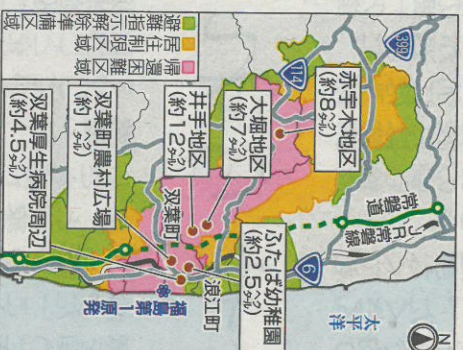


帰還困難区域モデル除染

地区	地目	測定 点数	放射線の平均値 除染前	放射線の平均値 除染後	低減率 (%)
赤宇木	住宅地	705	8.13	3.87	55
	農地	383	8.08	3.82	52
	道路	106	6.68	3.39	49
大堀	森林	38	8.67	7.47	14
	住宅地	584	8.88	3.26	63
	農地	202	9.50	2.78	71
井手	森林	115	6.94	2.63	62
	住宅地	46	10.31	8.01	22
	農地	825	18.07	8.47	53
〔双葉町〕 (地上1棟)	住宅地	944	17.81	8.82	50
	農地	233	17.55	7.92	55
	道路	92	16.19	13.68	16



生活圏なお高緑量

浪江、双葉 低減率49〜80%

環境省は10日、東京電力福島第一原発事故により帰還困難区域となった浪江、双葉町の計6地区で行った除染モデル実証事業の結果を発表した。住宅地など生活圏で測定した地上1坪の放射線量は、除染前と比べて浪江町の3地区が49〜71%、双葉町の3地区は65〜80%それぞれ低下したが、避難指示の目安となる年間20ミリシーベルト(毎時3・8ミリシーベルト)を下回る水準では低減しなかった。【3面に関連記事】

地区	地目	放射線の平均値(毎時)			低減率 (%)
		測定 点数	除染前	除染後	
双葉厚生病院	大型施設	525	10.26	3.01	71
	道路	33	8.44	2.75	67
	学校	213	11.65	3.81	67
ふたば幼稚園	公園	42	9.20	3.93	66
	草地・芝地	48	9.20	2.50	73
	住宅地	8	17.86	6.20	65
双葉町農村広場	公園	82	22.07	4.46	80
	森林	20	18.10	10.98	39

※測定点数は未除染エリアから10坪以内の測定点を除く
※井手地区の農地は除草、表土削り取り(5坪)を実施した段階のデータ
※森林は、林の縁から森林側に10坪程度入った部分を含む。
※森林の機能を損なわないように配慮
※ふたば幼稚園は地上50坪の放射線量

年間20ミリシーベルト下回らず

だが、高緑量の帰還困難区域で行う面的除染が不可欠なためには広範囲の緑量を下げとどめた。生活圏の線量を下げることと考えるに、対応を検討するデータを解析し、関係官庁と、江町の井手地区は除染後も平均で毎時13・68ミリシーベルトに達し、校打ちや除草など既存の方法に頼った除染の難しさが浮き彫りになった。

域で、住民帰還の鍵を握る

本格的な除染が進むかどうかは依然として不透明だ。実証事業では住宅地や農地、道路などの生活圏で屋根や壁の拭き取り、表土の削り取り、高圧水による洗浄など従来の手法で除染を実施した。6地区の結果は【表】の通り。除染後の線量は平均で、浪江町の住宅地が毎時3・26〜8・47ミリシーベルト、浪江町のふたば幼稚園、双葉町のふたば幼稚園が同3・81ミリシーベルト(地上5坪)に上り、長期目標の追加被ばく線量年1ミリシーベルト(毎時0・23ミリシーベルト)の14倍を超える水準だった。

天気

11日 5月14日 赤口 白

6	12	18	24時	12日	13日	14日	15日	16日	17日
福島	30	60	80	25	90	60	30	30	30
二本松	30	60	80	20	90	60	30	30	30
郡山	30	60	80	24	90	60	30	30	30
須賀川	30	60	80	19	90	60	30	30	30
田村	30	60	80	24	90	60	30	30	30
白河	30	60	80	17	90	60	30	30	30
相馬	40	60	90	23	90	60	30	30	30
南相馬	40	60	90	19	90	60	30	30	30
浪江	40	60	90	23	90	60	30	30	30

県や市町村は、帰還困難区域の住宅や農地など生活圏を含めた面的な除染を早急にする水俣だった。森林は住宅から20坪以内の範囲を除染。浪江町は14〜22%、双葉町は39%下がっただけで、生活圏上の低減の効果が乏しかった。浪江町の井手地区は除染後も平均で毎時13・68ミリシーベルトに達し、校打ちや除草など既存の方法に頼った除染の難しさが浮き彫りになった。

面的な除染については見通しを明らかにしていない。今後の技術開発が課題となる。

首相「集団的自衛権明記を」